マタイによる福音書におけるマカリズム(幸いの宣言)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-02-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 原口, 尚彰 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24422

マタイによる福音書における*マカリズム（幸いの宣言）

原　口　尚　彰

1. 問題の所在

新約聖書中のマカリズム（幸いの宣言）は，文頭に μακάριος / μακάριοι という言葉を置き，その後に幸いとされる根拠またはその状態の描写が続く文学形式であり，ヘブライ語の אשרי を μακάριος / μακάριοι と訳した七十人訳の用語法に倣ったものである[1]。幸いの宣言は，福音書や使徒言行録等の物語文学にも（マタ 5：3-12；11：6；13：16；16：17；24：46；ルカ 1：45；6：20-23；7：23；10：23；11：27, 28；12：37, 38；14：14, 15；23：29；ヨハ 13：17；20：29；使 20：35），書簡文学にも（ロマ 4：7, 8；14：22；Ⅰコリ 7：40；ヤコ 1：12, 25；Ⅰペト 3：14；4：14），黙示文学にも見られる（黙 1：3；14：13；16：15；19：9；20：6；22：7, 14）[2]。

従来の研究は山上の説教中と平野の説教に出て来るマカリズム（幸

* 本論考は，平成 20 年度科学研究費補助金基盤研究（C）による研究の一部である。

[1] 旧約・ユダヤ教における幸いの宣言の詳しい分析については，原口尚彰「4Q185/4Q525 における幸いの宣言」『教会と神学』第 42 号（2006 年）41-68 頁を参照。

[2] 使 26：2；Ⅰテモ 1：11；6：15；テト 2：13 にも形容詞 μακάριος は使用されているが，幸いの宣言という文学形式を採っていない。

いの宣言）の分析に集中しており，マタイ福音書に出て来る幸いの宣言の全体像を解明してはいない[3]。また，個々の幸いの宣言が物語的文脈の中で果たす機能についての詳しい分析も存在しない。本研究は，マタイによる福音書に登場する幸いの宣言を個々に釈義的に分析した後に，その神学的・文学的機能の全体像を明らかにする。特に，幸いの宣言が置かれた物語的文脈の中で果たす意味付けと機能に光を当てる。

2. 物語的文脈におけるマカリズム（幸いの宣言）

共観福音書について言えば，マカリズム（幸いの宣言）はマルコによる福音書には一度も出てこないが，マタイによる福音書とルカによる福音書には度々使用されている（マタ 5：3-12；11：6；13：16；16：17；24：46；ルカ 1：45；6：20, 21, 22；7：23；10：23；11：27, 28；12：37, 38, 43；14：14, 15；23：29)。マタイによる福音書とルカによる福音書に収録されているQ資料には，この文学形式を好んで用いる傾向がある(Q6：20, 21, 22；7：23；10：23；12：43)[4]。Q資

[3] J. Dupont, *Les Béatitudes* (3 vols; Paris: Gabalda, 1958-73); H. Frankmölle, "Die Makarismen," *BZ* 15 (1971) 54-55; S. Schulz, *Q. Die Spruchquelle der Evangelisten* (Zürich: Theologischer Verlag, 1972) 76-84; R. Guelich, "The Matthean Beatitiudes: 'Entrance Requirements' or Eschatological Blessings?," *JBL* 95 (1976) 415-434; G. Strecker, *Die Bertgpredigt. Ein exegetischer Kommentar* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1984) 28-49; I. Broer, *Die Seligpreisungen der Bergpredigt* (Königstein/Bonn: Hanstein, 1986); Sato, *Q und Prophetie* (WUNT 2/29; Tübingen: Mohr, 1988) 247-264; J. Kloppenborg, *The Formation of Q* (Philadelphia: Fortress, 1988) 172-173; U. Luz, *Das Evangelium nach Matthäus* (4 Bde.; 2. Aufl.; Neukirchen-Vluyn; Neukirchener Verlag, 2002) 1. 267-294.

[4] 詳しくは，原口尚彰「Q資料における幸いの宣言」『新約学研究』第36号(2008

料に含まれている伝承群には大まかな主題的まとまりはあるが，文書全体に明確なストーリーラインは認められず，マカリズムも物語的文脈に置かれているとは言えない。しかし，マタイによる福音書とルカによる福音書は，Q資料やそれぞれの特殊資料に含まれていた個々の幸いの宣言を，新たな物語的文脈に置くことによって文学的効果と新たな意味付けを創り出している。

ルカによる福音書の物語的文脈においては，イエスがマカリズムを告げるのに加えて（ルカ 6：20, 21, 22；7：23；10：23；11：28；12：37, 38, 43；14：14；23：29），他の登場人物がマリアや（ルカ 1：45；11：27）イエスに（ルカ 1：45）対する讃辞として，マカリズムを語ることがある[5]。これに対して，マタイによる福音書においてマカリズムを告げるのはイエスに限られる（マタ 5：3-12；11：6；13：16；16：17；24：46）。しかも，洗礼者の使者に対して，καὶ μακάριός ἐστιν ὃς ἐὰν μὴ σκανδαλισθῇ ἐν ἐμοί（そして，幸いである，私に躓かない者は。）と述べられる例外的事例を除いて（11：6），マカリズムが直接に向けられる相手は専らイエスの弟子たちである（5：3-12；13：16；16：17；24：46）。従って，マタイによる福音書におけるマカリズムは，教育的対話の中で示されたイエスによる弟子たちに対する啓示の言葉という性格が強い。

イエスがマカリズムを語るのは，発言の冒頭においてであることも（マタ 5：3-12；16：17；24：46），発言の結びの部分においてである

年）5-16 頁を参照。

[5] 原口尚彰「ルカによる福音書におけるマカリズム：幸いの宣言と物語的文脈」『教会と神学』第 46 号（2008 年）1-35 頁を参照。

こともある（マタ 11：6；13：16）。山上の説教冒頭においてマカリズムが 9 回重ねられて多重構造をとっている点は（マタ 5：3-12；さらに，ルカ 6：20-23 を参照），中間時代のユダヤ教文書におけるマカリズム（スラ・エノ 42：6-14；52：1-15；4Q185；4Q525）に並行している。幸いとされる根拠を示す文節は，来るべき神の国において与えられる終末的報い（マタ 5：3-12；さらに，ルカ 6：20-23 を参照）を語っており，旧約聖書の知恵文学が述べるような現世的幸福（箴 3：13；8：32-34；14：21；16：20；20：7；28：14；29：18；31：28 他を参照）を語るのではない。こうした特色は中間時代のユダヤ教文書における一部のマカリズム（エチ・エノ 58：2；81：4；82：4；スラ・エノ 42：6-14；52：1-15；モーセ昇 10：8 を参照）にも見られる[6]。

マカリズム（幸いの宣言）の修辞的機能について言えば，特定の状態や態度を幸いと宣言することは，基本的には一定の徳を称賛することを通して共同体の価値観を確認する演示的機能を果たしている（アリストテレス『弁論術』1358b；キケロ『発想論』1.5.7；『弁論家について』1.6.22；1.31.141；偽キケロ『ヘレンニウスに与える修辞学書』1.2.2；クウィンティリアヌス『弁論家の教育』3.4.1-16）。しかし，特定の状態または態度を称賛することは，聴衆がそうした状態に達することや態度をとること勧める助言的機能を結果として黙示的に持つのであるから，演示的機能は助言的機能を排除しない[7]。場合によっては，マカリズムの助言的機能が強化されることもある。

---

[6] 原口尚彰「4Q185/4Q525 における幸いの宣言」『教会と神学』第 42 号（2006 年）52-55 頁を参照。

[7] K. Berger, *Formgeschichte des Neuen Testaments* (Heidelberg: Quelle & Meyer, 1984) 188-194 は，幸いの宣言を「助言的類型」に分類している。

3. マタ 5：3-12 におけるマカリズム（幸いの宣言）

Μακάριοι οἱ πτωχοὶ τῷ πνεύματι,

ὅτι αὐτῶν ἐστιν ἡ βασιλεία τῶν οὐρανῶν.

μακάριοι οἱ πενθοῦντες,

ὅτι αὐτοὶ παρακληθήσονται.

μακάριοι οἱ πραεῖς,

ὅτι αὐτοὶ κληρονομήσουσιν τὴν γῆν.

μακάριοι οἱ πεινῶντες καὶ διψῶντες τὴν δικαιοσύνην,

ὅτι αὐτοὶ χορτασθήσονται.

μακάριοι οἱ ἐλεήμονες,

ὅτι αὐτοὶ ἐλεηθήσονται.

μακάριοι οἱ καθαροὶ τῇ καρδίᾳ,

ὅτι αὐτοὶ τὸν θεὸν ὄψονται.

μακάριοι οἱ εἰρηνοποιοί,

ὅτι αὐτοὶ υἱοὶ θεοῦ κληθήσονται.

μακάριοι οἱ δεδιωγμένοι ἕνεκεν δικαιοσύνης,

ὅτι αὐτῶν ἐστιν ἡ βασιλεία τῶν οὐρανῶν.

μακάριοί ἐστε

ὅταν ὀνειδίσωσιν ὑμᾶς καὶ διώξωσιν καὶ εἴπωσιν πᾶν πονηρὸν

καθ' ὑμῶν [ψευδόμενοι] ἕνεκεν ἐμοῦ.

χαίρετε καὶ ἀγαλλιᾶσθε,

ὅτι ὁ μισθὸς ὑμῶν πολὺς ἐν τοῖς οὐρανοῖς οὕτως γὰρ ἐδίωξαν

τοὺς προφήτας τοὺς πρὸ ὑμῶν.

6

幸いである，霊において貧しい者たち，

天国は彼らのものである。

幸いである，悲しむ者たち，

彼らは慰められるであろう。

幸いである，柔和な者たち，

彼らは地を嗣ぐであろう。

幸いである，義に飢え渇く者たち，

彼らは満たされるであろう。

幸いである，憐れみ深い者たち，

彼らは憐れみを受けるであろう。

幸いである，心の清い者たち，

彼らは神を見るであろう。

幸いである，平和を創り出す者たち，

彼らは神を見るであろう。

幸いである，義のために迫害されている者たち，

天国は彼らのものである。

幸いである，あなた方は，

私のために，人々があなた方を憎むとき，

また，あなた方を追放し，人々があなた方を叱責し，迫害し，悪罵するとき。

喜び，躍り上がりなさい，

天におけるあなた方の報いは多いからである。同じように，彼らはあなた方より前の預言者たちに対して行ったからである。

マタ 5: 3-12 はルカ 6: 20-23 に並行しており，資料的には Q 資料に由来する（Q6: 20-23)。この幸いの宣言はイエスの山上の説教（マタ 5: 3-7: 27)の導入部を構成しており，演説の基調を提示している。イエスは説教の聞き手である弟子たちに対して(5: 1-2)，幸いを荘重に告知し，引き続いて語られる数々の勧めの言葉の基盤を与えており，幸いの宣言は弟子性と結び付いている[8]。マタイの理解によれば，幸いの中に歩む者に対して，義を実践する道としてイエスが示したのが六つの反対命題である（5: 17-20; 5: 21-26; 5: 27-30; 5: 31-32; 5: 33-37; 5: 38-42; 5: 43-48)。物語全体を眺めると，23 章で律法学者やファリサイ派に対して，偽善者として災いの宣言がなされ，山上の説教において語られたイエスの弟子たちに対するマカリズム（幸いの宣言）と対置されている[9]。この福音書の読者も弟子たちと同様に，マカリズムを自分たちに語られた言葉として受け止め，律法学者やファリサイ派の道に従うのではなく，「狭い門から入り」(7: 13)，山上の説教に示された道に歩むように勧められている。

マタ 5: 3-12 では，九重のマカリズムが山上の説教の冒頭に出て来ている。このマカリズムでは，幸いと宣言される人々は複数であり，冠詞 οἱ を伴って名詞的に使用された分詞によって表現されている（マタ 5: 3-12)。文体は三人称複数形で書かれており，二人称複数形を用いる平野の説教のマカリズム（ルカ 6: 20-23) とは文体上の違いがある。

---

[8] ガリラヤの群衆は，山上の説教の第 2 次的聴衆として登場する（7: 28-29)。

[9] W. Zimmerli, "Die Seligpreisungen der Bergpredigt und das Alte Testament," in *Donum Gentilicium* (FS. D. Daube; ed. E. Bammel et. al.; Oxford: Clarendon, 1978) 15; R. H. Gundry, *Matthew: A Commentary on his Handbook for a Mixed Church under Persecution* (Grand Rapids: Eerdmans, ²1994) 69 もこの点に注目する。

山上の説教中のそれぞれのマカリズムは，その後に ὅτι に導かれ，幸いである理由を示す副詞節を伴っている。但し，第9のマカリズムは，二人称複数形の動詞が使用されている上に条件節を伴っているので，最初の8つのマカリズムとは文体上かなりの相違がある。

修辞的な効果の点から言うと，三人称を用いる場合は，一般原則を宣言することになり，より客観的な発言となるし，二人称を用いる場合は対話的な性格が強まり，聴衆への直接の語りかけの性格が強くなる[10]。山上の説教における幸いの宣言は三人称によって書かれているのであり，説教の冒頭で一般的な原則を宣言する綱領的意義を有している。

第1宣言と第8宣言において，幸いと宣言する理由を与える後半部に，天国の付与という終末的概念が提示されている（マタ5：3, 10)。山上の説教中の他のマカリズムの後半部には，動詞の未来形が使用されており（5：4, 5, 6, 7, 8, 9)，終末時における運命の逆転（5：4, 6, 7）や究極的な幸いとされる救いの状態（5：5, 8, 9）が幸いの根拠とされている。この事情は，山上の説教中のマカリズムが，知恵文学的な性格ばかりでなく，黙示文学的な性格も併せ持っていることを示している[11]。しかし，聴衆は将来に約束されている運命の故に，地上で生活している今既に幸いであると宣言されており，死後の世界における

---

[10] H. D. Betz, *The Sermon on the Mount* (Minneapolis: Fortress, 1995) 93-94; D. Hellholm, "Beatitudes and their Illocutionary Functions," *Ancient and Modern Perspectives on the Bible and Culture* (ed. A. Yarbo Collins; Atlanta: Scholars Press, 1998) 284-334.

[11] W. D. Davies/D. Allison, 1.434, 439; B. Witherington III, 118-119; G. Eichholz, *Auslegung der Bergpredigt* (6. Aufl.; Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 1984) 27; G. Strecker, *Die Bergpredigt. Ein exegetischer Kommentar* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1984) 32.

幸いを語っているのではない[12]。この点では，死者の幸いを宣言する黙示文学のマカリズムとは決定的に異なっている（エチ・エノ 58：2；81：4；スラ・エノ 42：6；58：2；82：4；黙 14：13；19：9；20：6）。

Q 原本段階で幸いの宣言が三人称複数形で書かれていたのか，二人称複数形で書かれていたのかという問題がある。私は Q 原本段階において初めの 3 つの幸いの宣言（Q 6：20-21）は三人称で書かれ，4 番目の幸いの宣言（Q 6：22-23）は二人称で書かれていたと推定する[13]。それを Q マタイ（Q 資料のマタイ版）がそのまま保存したのであった。Q マタイには，幸いの宣言を拡張する傾向が見られる。Q マタイは Q 原本が伝える 4 つの幸いの宣言に加えて，「柔和な者」（マタ 5：5），「憐れみ深い者」（5：7），「心の清い者」（5：8），「平和を作り出す者」（5：9）が幸いであると宣言している[14]。追加されたこれら 4 つのマカリズムは，幸いとされる者の生きる姿勢を問題にしており，倫理的性格が強くなっている[15]。

Q マタイにおけるマカリズムの特色は，七十人訳の言語の影響が強く，全体として旧約聖書の思想世界に近付いていることである。Q マタイは泣く者の幸いを告げる Q 原本の三番目のマカリズムを（Q6：21b），悲しむ者の幸いに変えた上で，二番目に置いている（マタ 5：4）。

---

[12] Eichholz, 28；Tannehill, 115；原口「黙示録」55 頁を参照。
[13] Davies/Allison, 1.434.
[14] Davies/Allison, 1.454；Strecker, 31.
[15] J. Gnilka, *Das Matthäusevngelium* (2 Bde；HThK 1/1-2；Freiburg：Herder, 1986-88) 1.117, 130；K.-W. Niebuhr, "Die Seligpreisungen in der Bergpredigt nach Matthäus und im Brief des Jakobus," in *Neutestamentliche Exegese im Dialog* (FS. Ulrich Luz；hrsg. v. P. Lampe, M. Mayordomo und M. Sato；Neukirchen-Vluyn：Neukirchener Verlag, 2008) 278-280；Strecker, 31；Luz, 1.276；Luck, 56 も同様。

Qマタイが強調する「悲しむ者（οἱ πενθοῦντες）」の慰めという主題は，イザ61：2 LXXが語る，「悲しむ者すべてを慰める（παρακαλέσαι τοὺς πενθοῦντας）」預言者の務めに一致する（イザ61：3 LXXも参照）。これは，貧しい者の幸いを語る第1のマカリズムに（マタ5：3），イザ61：1 LXXの成就を見出していることと呼応する。貧しい者に対する福音を語る務めが（イザ61：3 LXX）イエスにあって成就しているという認識は，既にQ原本にあるが（Q7：23；マタ11：6），Qマタイではこの見解がより強化された形で出て来ており，霊において貧しい者（5：3）が悲しむ者（5：4）に等置され，神の国における慰めが約束されるのである。

Qマタイが付加した柔和な者を幸いとする第3の宣言は（マタ5：5），使用されている用語の点から見て，「柔和な者は地を嗣ぐであろう」と告げる詩37：11 LXXを下敷きにしたマカリズムであることは明かである。憐れみ深い者が憐れみを受けることを告げる第4の幸いの宣言は（マタ5：7），貧しい者を憐れむ者が憐れみを受けると語る箴14：21の主題を幸いの宣言の形式に仕立て上げたものであろう。マタ5：7後半部は，「彼らは憐れみを受けるであろう。」となっており，受動態動詞の動作主が明示されていないが，動作主として神が想定されていると考えるべきであろう。

心の清い者の幸いを告げ，神を見ることを約束する第6のマカリズムは（マタ5：8），詩24：4 LXXを想起させる。詩24：4は祭儀的背景の下に成立しており，主の山に登って来た巡礼たちに対して，神殿の門番が，神殿に参上して祭壇の前に立つことの出来る者の資格要件を問い（詩24：3），巡礼たちがそれに応えるという構造をとっている

(24：4-6)。主の山に登り，聖所に立つ者は，「手が潔白であり，心が清い者」でなければならないのである（詩24：4)。Qマタイの第6の幸いの宣言は，神を見ることを約束している。神を見るという表象は，新約聖書においては終末時に与えられる賜物と考えられており（Iコリ13：12を参照)，Qマタイは詩24が前提にする祭儀的表象を終末的展望の中に置き換えたのであった。

平和を創り出す者の幸いを告げる第7のマカリズムの主題は，箴10：10 LXXにヒントを得たものであろう。箴10：10 LXXには，「平和を創り出す者たち（οἱ εἰρηνοποιοί）」という名詞句はないが，はっきりと諫める者が「平和を創り出す（εἰρηνοποιεῖ)」という動詞句が用いられている。「平和を創り出す者たち（οἱ εἰρηνοποιοί)」が神の子らと呼ばれることを約束する後半部は，イスラエルの民が「生ける神の子ら」と呼ばれることを約束するホセヤの預言を思い起こさせる（ホセ2：1；ロマ9：26を参照)[16]。以上，Qマタイが付加した4つのマカリズムにおいて旧約的な主題の色彩が濃厚であるため，一連のマカリズムの全体が旧約聖書の預言の成就という性格を帯びている。

他方，マタイによる福音書は義の概念を強調し，第5のマカリズムでは，単に「飢える者」の幸いを宣言する（Q6：21）のではなく，「義に飢え渇く者」の幸いを宣言している（マタ5：6)。この義の概念は，「義のために迫害されている者」の幸いを告げる第8のマカリズムに再度登場し，マカリズム相互の主題的関連性を強めている。さらに，この福音書記者は，Q資料より継承した第9のマカリズムを直後に配し

[16] M. J. Goodwin, "Hosea and the 'Son of the Living God' in Matthew 16：16b," *CBQ* 67 (2005) 265 283を参照。

ており(マタ 5: 11-12)，イエスへの信実と宣教活動故に迫害される者に対して天上の報いと幸いを宣言している。

「飢える」ことは社会的・経済的領域の事柄であるが，「義に飢え渇く」のは精神的・宗教的領域の事柄である。同様に，第1のマカリズムにおいて，Q原本では「貧しい者」の幸いが宣言されているのに対して (Q6: 20)，マタイは「霊において」という句を付加して，神の前に謙遜な心の在り方を幸いと宣言している(マタ 5: 3)。ここでも社会的・経済的領域の事柄が，精神的・宗教的領域へと移されているのである[17]。

4. マタ 11: 6 におけるマカリズム（幸いの宣言）

マタ 11: 6 (Q7: 23) におけるマカリズムは，獄中の洗礼者ヨハネが使者をイエスの下に遣わして，イエスがメシアであるかどうかを尋ねるペリコペーに出て来る（マタ 11: 2-19; ルカ 7: 18-35)。物語の前半は (マタ 11: 2-6)，ヨハネの使者とイエスとの対話であり，後半は(11: 7-19)，ヨハネについてイエスが群衆に語る2つの講話である (11: 7-15; 11: 16-19)。このマカリズムは(11: 6)，物語の前半部を締め括る言葉として出て来る。物語の前半部については，マタ 11: 2-6 とルカ 7: 18-23 はほぼ一致しているが，後半の結びの部分についてはかなりの相異がある（マタ 11: 7-19 とルカ 7: 24-35 を比較せよ)。

[17] Davies/Allison, 1.442-444 を参照。この傾向を，Strecker, 34, 38; Luck, 56 は，「精神化 (Spiritualisierung; Vergeistigung)」と呼び，Luz, 1.290 は「倫理化 (Ethisierung)」と呼ぶ。

マカリズムの文言はマタイ版もルカ版も，καὶ μακάριός ἐστιν ὃς ἐὰν μὴ σκανδαλισθῇ ἐν ἐμοί（そして，幸いである，私に躓かない者は）で一致している。この言葉は，「あなたは来るべき方ですか？それとも私たちは他の方を待つのですか？」というヨハネの使者の言葉（マタ 11：3）に答えるイエスの言葉（11：4-6）の結びとなっている。イエスは自らのメシア性について命題をもって直接に答えることをせず，病人を癒し，悪霊を追放し，福音を語る自らの活動を（11：5），イザヤ書の引用（イザ 29：18；35：5-6；26：19；61：1）によって，メシアのしるしとして提示した後に，「そして，幸いである，私に躓かない者は」と告げるのである（11：6）。言葉の結びとして用いられた幸いの宣言は，言葉を聞く者がその真意を理解し受容すると幸いに到ることを約束しており，言葉を受け入れるように勧める機能を持つ。同様な文学的効果は，黙示録の冒頭に置かれた幸いの宣言にも認められる（黙 1：3）[18]。イエスはここで洗礼者の使者たちに，イエスのメシア性の証人となるよう促しているのである[19]。

「そして，幸いである，私に躓かない者は」という否定の仮定を可能性として含む言い方は（13：57；26：31, 33 を参照），自らのメシア性を主張するイエスの言葉を拒否する者に警告を与えると同時に，イエスをメシアとして受け入れる者に幸いを約束する両義的機能を果たしている[20]。この語録はイエスのメシア性についての，教会と洗礼者教団の間に存在する論争を前提としており，史的イエスよりも初代教会に

[18] 原口尚彰「黙示録における幸いの宣言」『新約学研究』第 35 号（2007 年）50-52 頁を参照。
[19] Gnilka, 1.407.
[20] Gnilka, 1.409.

遡る伝承であると推定される。マタイはQが伝えるこの幸いの宣言の文言を忠実に再現している。マタイの文脈において，この宣言は直接には洗礼者ヨハネの使者に向けられているが，それは同時に言葉を傍聴しているイエスの弟子たちにもこの福音書の読者にも向けられている[21]。

5. マタ 13：16 におけるマカリズム（幸いの宣言）

マタ 13：16（Q10：23）における幸いの宣言は，喩え話のアレゴリカルな解釈の根拠付けの中に出て来る（マタ 13：10-17）。幸いの宣言を含む語録は，マタ 13：16-17 とルカ 10：23-24 に保存されており，マタイ版の本文はより長大である。幸いの宣言の語り手はイエスであり，聞き手は弟子たちである。幸いの宣言の本文は，ὑμῶν δὲ μακάριοι οἱ ὀφθαλμοὶ ὅτι βλέπουσιν καὶ τὰ ὦτα ὑμῶν ὅτι ἀκούουσιν（幸いである，あなた方の目は見えており，あなた方の耳は聞こえている。）であり，弟子たちへの語り掛けとなっている[22]。マタイはQ資料の幸いの宣言の本文を（Q10：23），直前に引用されているイザ 6：9-10 の本文に対応して，目が見るということと耳で聞くということを平行させ，καὶ τὰ ὦτα ὑμῶν ὅτι ἀκούουσιν を付加している（マタ 11：4-5 も参照）。マタイはさらに，ὑμῶν（あなた方の）という句を 2 箇所に付加し，ἃ βλέπετε を ὅτι βλέπουσιν に変えて文体を整えている。弟子たちの目や耳が幸いとされる理由は，多くの預言者や王たちが見聞きしたいと願っても出

[21] Luck, 136；Fiedler, 238；Nolland, 452.
[22] U. Luz, "Die Jünger im Matthäusevangelium," *ZNW* 62 (1971) 149 を参照。

来なかったことを彼らが見聞きしているからである（マタ 13：16-17）[23]。彼らの目撃者としての体験はより総合的になり，イエスの行いを見るだけでなく，その教えの言葉を聞くことが大切となる。

Q 資料はイエスの宣教活動を目撃することの幸いを，旧約の預言者や王たちに優る特権としている（ルカ 10：23-24 を参照）。この幸いの宣言は Q からマタイに継承される段階で，弟子性と天国の観念との結び付きがより強調されることとなった。マタイによる福音書は，Q 教団の宣教者たちの幸い理解を継承しながらも一定の改変を加え，この幸いの宣言を，喩え話しの意味を巡るイエスと弟子たちの間に交わされた教育的対話の文脈に移し替えている。マタイによれば，喩え話しの真の意味は部外者には隠されているが，弟子たちには天国の奥義として特別に開示される。喩え話しの隠された意味が開示される特別な地位は幸いであり，それは物語を読むマタイ共同体の信徒たちに継承されている。

6. マタイ 16 章 17 節におけるマカリズム（幸いの宣言）

このマカリズム（幸いの宣言）は，フィリポ・カイサリアへ向かう途上でイエスが弟子たちと行った自らのメシア性についての対話の記事の中に出て来ている（マタ 16：13-20）。この記事の後には，第 1 回目の受難予告の記事と（16：21-23），イエスが弟子たちに与えた十字架を背負って従う勧めの記事が続いている（16：24-28）。

[23] 救いを目撃することについての幸いの宣言は，外典文書の IV エズ 10：57；ヨセ・アセ 16：14 にも見られる。

イエスが油注がれた者（キリスト）であることは，マタイによる福音書の冒頭以来（マタ 1：1, 16, 17, 18；2：4；11：2 を参照），語り手によって読者に対しては開示されている事実であるが，物語の多くの登場人物たちには秘密に留まり，人々の間にはイエスが誰であるかということについて様々な見解が流布していた。こうした状況を踏まえて，フィリポ・カイサリア途上でイエスは，弟子たちに自身のメシア性に関する人々の見解について尋ねた後に，弟子たち自身の認識を問うた（16：13-15）。これに対して，ペトロが弟子たちを代表して，σὺ εἶ ὁ χριστὸς ὁ υἱὸς τοῦ θεοῦ τοῦ ζῶντος.（あなたは生ける神の子キリストです。）と答えた（16：16）。

マタイによる福音書の物語において，人々はイエスの言葉の権威に驚くが（マタ 7：28-29），イエスが油注がれた者（キリスト）であるという認識に到り，そのことを物語の登場人物が表明するのは，フィリポ・カイサリア途上におけるキリスト告白が初めてである。しかも，イエスは弟子たちにこの認識を他の人々には告げるなと命じている（16：20）。

イエスが神の子であるという事実は，既にイエスの受洗の場面で天からの声によって示され（3：17），超自然的勢力であるサタンや（4：3, 6），悪霊はその事実を知っている（8：29）。イエスの弟子たちは，イエスの海上歩行や嵐を鎮める力に直面してこの事実を知り，イエスを神の子と呼んでいる（14：33）。ペトロはこのことを踏まえて，イエスを「生ける神の子キリスト」と告白したのである（16：17）。「生ける神の子」という呼称を用いることはキリスト論的に重要であり，イエスに神性を認めて告白することを意味している[24]。イエスが神の子で

あることと油注がれた者（キリスト）であるということは，物語の結びの受難物語において大祭司の審問において公に問われ，イエス自身が肯定することになる（26：63-64）。また，イエスの十字架刑の執行の場面になって，百人隊長はイエスが「本当に神の子であった」と告白することになる（27：54）。

従って，マタイによる福音書の物語の中間部の段階で，イエスが生ける神の子であり，油注がれた者（キリスト）であるという認識を与えられているのは物語の登場人物の中では弟子たちだけであり，それに対してイエスは，Μακάριος εἶ, Σίμων Βαριωνᾶ, ὅτι σὰρξ καὶ αἷμα οὐκ ἀπεκάλυψέν σοι ἀλλ' ὁ πατήρ μου ὁ ἐν τοῖς οὐρανοῖς.（幸いである，ヨナの子シモンよ。血肉ではなく，天にいます私の父があなたに啓示したのだから。）と語ったのであった（16：17）。マタイ 16 章 17 節は，ペトロのキリスト告白に対するイエスの応答の言葉の冒頭に出て来る導入句である（16：17-19）。冒頭に用いられたマカリズムは，注意を喚起し，発言の基調を与える効果を持つ（マタ 5：3-12；16：17；24：46 を参照）。

このマカリズムは，マタイによる福音書では例外的に二人称で書かれ（他の例外は，5：11），十二弟子の筆頭格であるペトロに向けられている（16：17a）。幸いであることの理由は，イエスが「生ける神の子キリストである」という認識を「血肉」（つまり，人間）でなく，「天

[24] R. H. Gundry, *Matthew : A Commentary on his Handbook for a Mixed Church under Persecution* (2nd ed.; Grand Rapids: Eerdmans, 1994) 330; W. D. Davies and D. C. Allison Jr. *The Gospel according to Saint Matthew* (ICC; 3 vols; Edinburgh: T & T Clark, 1988-1997) 2.642; J. Nolland, *The Gospel of Matthew : A Commentary on the Greek Text* (Grand Rapids: Eerdmans, 2005) 665.

にいます私の父」である神が特別に啓示したという事実にある（16：17b）[25]。ここで用いられている動詞 ἀποκαλύπτω は，パウロが自身の回心の体験を回顧する記述の中で，神が御子を啓示したことに関して用いており，神の特別な啓示を表す術語である（ガラ 1：16）[26]。パウロは神の御子の啓示によって回心し，異邦人にキリストの福音を語る使徒としての召命を受け，「血肉」に相談することなく，宣教の旅に赴いている（1：15-17）。他方，この動詞は Q 資料でも福音に関する神の特別な啓示を表す術語として用いられ（Q10：21, 22；12：2），マタイはそれを 3 箇所で引用している（マタ 10：26；11：25, 27）。つまり，神の子についての認識は啓示によって弟子たちに与えられ，彼らがその認識を保持していると，マタイによる福音書は理解している。マタイ共同体とユダヤ教指導者たちとを分かつ決定的な相違は，イエスを「生ける神の子キリストである」という認識を受け入れるかどうかであった。マタイ 16 章 17 節のマカリズムは，キリスト論的認識の正当性を正統ユダヤ教に対して主張する意味がある。

マタイによる福音書の物語においてイエスはさらに言葉を続け，シモンにペトロ（πέτρος）という名を付け，この岩（πέτρα）の上に教会を建て，天国の鍵を与えることを宣言する（16：18-19）。ここでも，マカリズム（幸いの宣言）は，山上の説教におけると同様に（5：3, 10 を参照），弟子性と天国の観念とに強く結び付いている。マタイによる福

[25] J. Gnilka, *Das Matthäusevngelium* (2 Bde; HThK 1/1-2; Freiburg: Herder, 1986-88) 2.48; Luck, 185; P. Fiedler, *Das Matthäusevngelium* (ThKNT 1; Stuttgart; Kohlhammer, 2006) 287; B. Witherington III, *Matthew* (Macon, GA: Smyth & Helwys, 2006) 311.

[26] 動詞 ἀποκαλύπτω の詳しい語学的分析は，LSJ 201; Bauer-Aland, 184; A. Oepke, *ThWNT* III 565-597; T. Holtz, *EWNT* I 312-317 を参照。

音書全体を見渡すと，ペトロとは対照的に，ファリサイ派や律法学者らユダヤ教指導者たちは，天国への戸を閉ざす偽善者として災いの宣言の対象となっている（マタ 23：13 を参照）。

マタイ 16 章 17 節においてマカリズムはペトロに対して語られているが，物語全体としては一人の人間であるペトロ個人を讃美することを注意深く避けている。イエスは直ぐ後の受難予告において，それを咎めるペトロに対して，「わたしのもとから下がれ，サタンよ。あなたはわたしの躓きである。あなたは神のことではなく，人間のことを思っているのだから。」と厳しい叱責の言葉を浴びせている（マタ 16：21-23 を参照）。また，ペトロは海上歩行の出来事において恐れたために信仰の薄さを詰られ（14：28-31），最後の晩餐の席上においてイエスを裏切らないと誓っていながら（26：33-35），イエスの逮捕・審問の場面ではイエスを裏切ってイエスとの関係を否認したことを，福音書記者は叙述している（26：69-75）[27]。マタイによる福音書によれば，ペトロに語られたマカリズムは，人間を賞賛することではなく，イエスのメシア性の認識を啓示した神への讃美を目的としていると言える。

マタイ16章17節の文章は，Μακάριος εἶ, Σίμων Βαριωνᾶ, ὅτι σὰρξ καὶ αἷμα οὐκ ἀπεκάλυψέν σοι ἀλλ' ὁ πατήρ μου ὁ ἐν τοῖς οὐρανοῖς.（幸いである，ヨナの子シモンよ。血肉ではなく，天にいます私たちの父があなたに啓示したのだから。）となっている。このマカリズム（幸いの宣言）は，二人称で書かれている点と，copula（繋辞）が置かれ

[27] Kähler, 42；H. Kvalbein, "The Authorization of Peter in Matthew 16：17-19：A Reconsideration of the Power and Loose," in *The Formation of the Early Church* (ed. J. Ådna；WUNT 183；Tübingen Mohr, 2005) 168 も，マタイによる福音書がペトロの人間的な弱さを描いている点に注目している。

ている点に特色がある。マカリズム（幸いの宣言）は，旧約聖書においても(詩 1：1-2；2：12；32：1-2；33：12；84：5-6；イザ 30：18；32：20；56：2；箴 3：13；8：32-34；16：20；20：7；28：14 他多数)，新約聖書においても(マタ 5：3-10；11：6；13：16；24：46；ルカ 1：45；7：23；10：23；11：27, 28；12：37, 38；14：14, 15；23：29；ヨハ 13：17；20：29；使 20：35；ロマ 4：7, 8；14：22；Ⅰコリ 7：40；ヤコ 1：12, 25；Ⅰペト 3：14)，三人称で書かれるのが一般的であり，二人称で書かれるのは例外的である(申 33：29；詩 128[127]：2；コヘ 10：17；ルカ 6：20-23；ヨハ 13：17；Ⅰペト 3：14；4：14)[28]。マタイによる福音書における二人称の幸いの宣言はマタ 5：11 にも見られるが，そこでは聞き手が弟子たちの集団であるので（マタ 5：1-2 を参照)，二人称複数形が用いられている。二人称の中でも単数形で書かれ特定個人に宛てられている幸いの宣言の例は，新約聖書ではこの箇所とルカ 14 章 14 節以外には見当たらない。

マカリズム（幸いの宣言）は詩文であり，copula（繋辞）を省略するのが基本であるが，原則を崩して copula（繋辞）を挿入する場合もある。copula（繋辞）を挿入すると文章全体が散文に近付いて来る効果がある。そのような例は旧約聖書には大変少ないが(詩 128［127]：2)，新約聖書においてはかなり多く見られる(マタ 5：11；11：6；16：17；ルカ 6：22；7：23；12：38；14：14；ヨハ 13：17；使 20：35)。特に福音書におけるイエスと弟子たちとの教育的対話の中で用いられるマカリズムは，copula（繋辞）を伴う場合が多くある（マタ 5：11；

[28] 外典文書における二人称のマカリズムの例は，IV エズ 10：57；III エノ 4：9；ヨセ・アセ 16：14；バル福 1：8；マリ福 10 の例がある。

11：6；16：17；ルカ 6：22；7：23；12：38 他を参照)。

尚，特別な啓示の受領者に対して与えられるマカリズムの例は，外典文書にも見られ，それぞれの伝承を担った集団の秘教的な救済認識を表している（IV エズ 10：57；ヨセ・アセ 16：14；バル福 1：8；マリ福 16：14)[29]。IV エズラ書はシリア語のバルク黙示録と同様に，後 66-70 年において起こったユダヤ戦争の結果，エルサレムが陥落し廃墟に帰した衝撃に対する反応として書かれた黙示文書である。文書はエズラが見た黙示的ヴィジョンと，その意味を解き明かす天使ウリエルとエズラの対話からなっている。エズラが夢の内に見たエルサレムの回復の幻に関して解釈天使ウリエルは，Tu enim beatus es prae multis et vocatus es apud Altissimum sicut et pauci.（あなたは多くの人よりもまさに幸いであり，いと高き方のもとに召されているが，これは少数の人にしかないことである。）と述べる[30]。ユダヤ戦争後，廃墟の中にあるシオンの都の回復は，終末の時に神によって実現される出来事であり，現在は人々の目には隠されている。この黙示はエズラだけに夢の幻を通して与えられ，エズラは目で見，耳で聞くことが許されているので（IV エズ 10：56)，彼は幸いと宣言されている。

ヨセフとアセナテは，エジプトのヘリオポリスの祭司ペンテプレスの娘アセナテのユダヤ教への回心を主題とする古代小説である。ヨセフとアセナテ 16 章 7 節（長本文では 16 章 14 節）において，天使は罪を悔い改めてユダヤ教の神へ回心したアセナテに対して，永遠のいの

[29] これらの外典箇所の詳しい分析については，C. Kähler, "Zur Form- und Traditionsgeschichte von Matt.xvi.17-19," *NTS* 23 (1977) 46-55 を参照。

[30] ラテン語本文は，*Biblia Sacra iuxta Vulgatam versionem* (3. verbessrte Aufl.; Stuttgart: Deusche Bibelgesellschaft, 1983) に依拠している。訳文は私訳である。

ちを与えるとされる蜜を含むミツバチの巣を示して，Μακάριος εἶ σύ, 'Ασενέθ, ὅτι ἀπεκαλύφθη σοι τὰ ἀπόρρητα τοῦ θεοῦ, καὶ μακάριοι οἱ προσκείμενοι κυρίῳ τῷ θεῷ ἐν μετανοίᾳ ὅτι ἐκ τούτου τοῦ κηρίου φάγονται (幸いである，あなたは，アセナテよ。神の秘儀があなたに啓示されたからである。また，幸いである，悔い改めて主なる神に結ばれた者たちは。彼らはこのハチの巣から食べているのである）と語る[31]。このマカリズムは回心者が隠された救いの秘儀に与ることを捉えて幸いと宣言している。ヨセフとアセナテはヘレニズム時代から帝政ローマ期にかけてのエジプトで成立したと考えられ，異教徒がユダヤ教に改宗することを救いの秘儀に与ることと捉えている点に特色がある。救いの秘儀に与った入信者に幸いを宣言するという主題は，ギリシア・ローマ世界の密儀宗教の祭儀に見られ，様々な文書に言及されている（『デーメーテールへのホメロス風讃歌』480-483；ピンダロス『断片』121；エウリピデス『バッコスの信女』72-77；アプレイオス『変身』11.16 他）[32]。ヨセフとアセナテの幸いの宣言には，当時の密儀宗教のマカリズムの影響を認めることが出来る[33]。マタイ 16 章 17 節のマカリズムの文言は，言葉遣いの上でヨセフとアセナテ 16 章 7 節に非常に似ており，隠された特別な知識が特別に啓示されたことを主張している点も似ているが，福音書の物語的文脈の中において入信の

[31] ギリシア語本文は，M. Philonenko, *Joseph et Aséneth* (Leiden: Brill, 1968) より引用。日本語訳は私訳である。

[32] H. D. Betz, *Essays on the Sermon on the Mount* (Philadelphia: Fortress, 1985) 26-28; idem., *The Sermon on the Mount* (Minneapolis: Fortress, 1995) 97-100; D. Dormeyer, "Beatitudes and Mysteries," *Ancient and Modern Perspectives on the Bible and Culture* (ed. A. Yarbo Collins; FS. H. D. Betz; Atlanta: Scholars, 1998) 350-357.

[33] H. D. Betz, *Essays*, 28 n.28; idem., *Sermon*, 100.

祭儀という背景は退き，キリスト論的な認識が問題となっているところに相違がある。

マリアによる福音書10章14-15節において，幻の中に現れた救い主（イエス）がマグダラのマリアに対して，「あなたは祝されたものだ。私を見ていても，動じないから。というのは叡知あるその場所に宝があるからである」と述べたことが，マリアの言葉によって報告される[34]。マリアによる福音書はグノーシス派が生み出した外典福音書であり，それらを形成したグノーシス派の救済理解を示している。マリアによる福音書において，弟子たちの中でペトロとマリアは競合関係にあり，マリアだけに与えられた救い主の啓示の言葉の真実性をペトロは争う（マリ福17：16-18：8）。イエスのマカリズムはペトロでなく，特別な啓示を与えられたマリアの方に向けられている。この福音書を生み出したグループはマリアに仮託して，ペトロに象徴される正統教会ではなく，自分たちのグループの方に特別な啓示が与えられていることを主張している。正統教会に属するマタイ共同体は，ペトロに与えられた特別な啓示に対して主がマカリズムを宣言したとしているのに対して（マタ16：17），グノーシス派はマグダラのマリアに主がマカリズムを宣言したとしているのである。正統派の教会に属するグループと非正統のグループは，マカリズム（幸いの宣言）という同一の文学形式を正反対の自己理解を強化するために用いる現象を認めることが出来る。

バルトロマイによる福音書は，イエスが天使たちの助けによって十

[34] 日本語訳は，小林稔訳「マリヤによる福音書」『ナグハマディ文書II 福音書』岩波書店，1998年，122頁より引用。

字架の上から姿を消したとしている。この外典福音書によれば，そのことを目撃したバルトロマイに対して，特別な秘儀を目撃したとしてマカリズムが宣言されている(バル福 1：8)[35]。ここでは，マカリズムがこの福音書の背後にいるグループの特殊な仮現論的十字架理解を正当化するために使用されている。

トマスによる福音書にもマカリズムは多数使用されているが（トマ福　語録 7；19；49；54；68；69；79)，イエスから弟子たち全体に対して語る言葉の中に出て来ており，特定の弟子個人に向けられてはおらず，マタイ 16 章 17 節の正確な並行例は提供していない。マカリズム(幸いの宣言)は三人称で書かれている場合と(語録 7；69；79)，二人称で書かれている場合の両方がある(語録 19；49；54；68；79)。トマスによる福音書には共観福音書に並行伝承を持つマカリズム（語録 54 とルカ 6：20；語録 68 とマタ 5：11；語録 69 とマタ 5：10；語録 79 とルカ 11：27-28 を比較せよ）と持たないマカリズム（語録 7；19；49）とがあり，前者は初代教会の伝承段階において既にマカリズムの形式を備えていたものであり，後者はトマス福音書の背後にあるグループが作り出したものである。

尚，最近本文が公刊されたユダの福音書には，マカリズムは用いられていないが，正統教会のキリスト論を批判するグノーシス派の視点が明確に出て来ており，興味深い[36]。この外典福音書によると，イエス

---

[35] W. Schnemelcher (Hg.), *Neutestamentliche Apokryphen* (2 Bde；6. Aufl.；Tübingen：Mohr, 1990) 1.427 を参照。

[36] コプト語写本（チャコス写本）のファクシミリ版と校訂本と英訳が，解読チームにより 2007 年に公刊されている。R. Kasser/G. Wurst, *The Gospel of Judas together with the Letter of Peter to Philip, James, and a Book of Allogenes from Codex* (Washington D.C.；National Geographic, 2007) を参照。

の弟子たちがイエスが「神の子」であると述べたのに対して，イエスは彼らの内の誰もイエスを知ることはないのだと言って斥けている（ユダ福 35：11-17）。しかも，イエスの発言の冒頭には，アーメンが付され，啓示の言葉であることが強調されている（ユダ福 35：15）。ユダの福音書は，神の国の秘儀は正典福音書が主張しているのとは異なり，十二弟子全体に啓示されず，イスカリオテのユダだけに啓示されているとしている（ユダ福 35：14-27 とマタ 13：11；マコ 4：11；ルカ 8：10 を比較せよ）。この背後にあるグループはイスカリオテのユダに自己同一しながら，イエスの十二弟子たちに象徴される正統教会に対抗し，自分たちのキリスト理解の優越性を主張している。

7.　マタ 24：46 におけるマカリズム（幸いの宣言）

マタ 24：46（Q12：43）における幸いの宣言は，イエスが終末の到来に備える勧めを語る喩え話しの中に出て来る（マタ 24：45-51；ルカ 12：41-48）。この伝承はマタイ版もルカ版もほぼ一致している。伝承の主題は終末を迎える者の姿勢であり，主人の帰りが遅いときに言いつけを守って相応しい備えをしている忠実で賢い僕と，主人の帰りが遅いのをいいことに非倫理的な振る舞いをする不忠実な僕が対比されている。終末を迎える主題は黙示的であるが，忠実で賢い僕と不忠実な僕を対比し，前者に幸いを宣言し，後者に滅びを宣言する語り方は知恵文学的である。二つの倫理的態度を対照して提示し，前者に幸いを後者に滅びを宣言することは，知恵文学にしばしば用いられる語り方である（箴 2：1-22；3：21-35；4：10-19 他）。マタイは，この幸

いの宣言を，イエスが弟子たちに語った終末についての教えの中に置いたので（24：1-25：46），聞き手である弟子たちその聞き手である。

幸いの宣言の本文は，μακάριος ὁ δοῦλος ἐκεῖνος, ὃν ἐλθὼν ὁ κύριος αὐτοῦ τοῦ εὑρήσει ποιοῦντα οὕτως（幸いである，主人がやって来た時にそのようにしていると判明する僕は。）となっており，最後の2語（ποιοῦντα οὕτως）の語順の他はルカ版とマタイ版の間に相違はない。この幸いの宣言において，幸いである状態は主人の帰還に喩えられる終末の時に判明する。同様に，福音書記者マタイは，直ぐ後に，10人の乙女の喩えや(マタ25：1-13)，タラントンの喩えを配して(25：31-46)，終末を迎えるに相応しい信徒の態度を強調している。聞き手は幸いに達するためには，終末を迎えるに相応しい倫理的態度を維持し続けなければならないのである。この幸いの宣言は聞き手である弟子たちと，福音書の読者への勧告として機能することが期待されている。一部の注解者たちは，この幸いの宣言が管理者的立場にある教会指導者たちを念頭に置いていると主張する[37]。しかし，第一福音書全体を見ると，教会の職務に対する関心は少なく，職務による上下関係よりも，信徒の平等性の方が強調されているので(23：8-12)，この幸いの宣言もマタイの教会の信徒全員に向けられていると解すべきであろう[38]。

マタイによる福音書24-25章は，イエスが弟子たちに与えた終末についての説話という設定になっている(24：1-25：46)。聞き手であるマタイ共同体にとって，終末時に到来する世界の審判者である「人の子（υἱὸς τοῦ ἀνθρώπου）」(24：27, 37, 39, 44）と「主（κύριος）」(24：

[37] Gundry, 495 ; Luck, 267.
[38] Luz, 3.463-465.

42, 45, 46, 50）は語り手であるイエス自身である[39]。このキリスト論的主張が，イエスの弟子集団であろうとするマタイ共同体の信仰と当時のユダヤ教の正統派との決定的な相違の一つであった（26：63-64 を参照）。他方，イエスが弟子たちと共にいるという臨在の思想も，マタイによる福音書の初めと（1：23），中間と（18：20），結びに出て来ている（28：16-20）。イエスは地上の生涯に於いて弟子たちと共にある一方で（1：23），復活後の教会の礼拝に見えない姿で臨在し（18：20），委託を受けて世界に出て行って宣教する弟子たちに伴う（28：16-20）。マタイ共同体は，目に見えない姿で今の時に臨在するキリストを信じると共に，終末時の救いの完成を信じて，見える姿でキリストがやって来るのを待ち望み，いつも相応し備えをするように勧められているのである。

8. 結　　論

（1）マタイによる福音書において幸いの宣言を語るのは，ルカによる福音書と異なり（ルカ 1：45；11：27；14：15），専らイエスであるので，この福音書における幸いの宣言には啓示の言葉の性格が強い。さらに，マタイは幸いの宣言の第一次的聞き手をイエスの弟子たちとすることによって，弟子性との関連を強調している（特に，マタ 5：3-12；13：16；16：17）。弟子たちは天国への帰属が約束され（マタ 5：3, 10），弟子たちには天国の奥義が開示され（13：16），彼らはイエスの

[39] Davies/Allison, 3.388.

メシア性を啓示された者として天国の鍵が授けられる（16：19)。

(2) マタイにおける幸いの宣言の一部が，イエスのメシア性について特別な認識を与えられていることや(16：17)，開示された天国の奥義を理解する能力を与えられていることの幸いに言及していることは(マタ 13：16)，この福音書の幸い理解の主知側面を示している。マタイによる福音書において弟子たちは，イエスに従う者であると共に(4：20, 22；8：22；9：9, 19；10：38；16：24；19：21, 27-28)，イエスの教えを聞き (5：1-2；13：16, 18)，実践する者である (7：24-27)。イエスの教えを実践する前提として正しい理解が必要であるが，理解はイエスの言葉を聞くことから自動的に与えられるのではない。弟子たちはイエスとの教育的対話の過程を経て，より深い理解に到るのである (13：36-51；16：9-12；17：10-13)[40]。天国の奥義を理解するためには，彼ら自身の自発的問いとそれに答えるイエスの啓示の言葉が必要である。

(3) 山上の説教に含まれる幸いの宣言は，拡張的傾向が強い。既に，Q マタイ段階で，Q 原本が伝える幸いの宣言に，新に 4 つの幸いの宣言（マタ 5：5, 7, 8, 9）を付け加え，マタイによる編集段階で，さらに 1 つの幸いの宣言 (マタ 5：10) を付加した結果，全体として 9 重の幸いの宣言が形成されることとなった。付け加えられた幸いの宣言は，幸いとされる者の生きる姿勢を問題にしており，倫理的性格が強い。

(4) マカリズムという旧約聖書に由来する文学形式は，ユダヤ教でも初期キリスト教でも広範に用いられる。初期ユダヤ教や初期キリス

[40] U. Luz, "Die Jünger im Matthäusevangelium," *ZNW* 62 (1971) 149 は，この点を強調する。

ト教のマカリズムは文体的にも内容的にも非常に多様であり，それぞれのマカリズムはそれを形成し，担った集団の宗教観を反映してそれぞれ他とは異なる特色を備えている。マタ 16：17 おいてペトロに与えられているマカリズム（幸いの宣言）は，マタイ共同体が持つキリスト論的認識の正当性を正統ユダヤ教に対して主張する意味がある。これとは対照的に，グノーシス派が生み出したマリアによる福音書やバルトロマイによる福音書のマカリズムは（マリ福 10：14-15；バル福 1：8)，キリスト教内の正統教会に対して非正統のグループが自分たちの信仰理解の正当性を主張している。特に，マリアによる福音書は，ペトロとマグダラのマリアを弟子たちの中で競合する関係として捉え，ペトロではなくマリアの方に幸いの宣言がなされたとする。幸いの宣言という文学形式を援用して自分たちのグループの信仰認識の正当性を主張することにおいて両者は一致しているが，特別な啓示の受領者を誰とするかということでマタイ福音書と非正統なグループとの態度が分かれているのである。

文　献　表

注　解　書

Allen, W. C. *A Critical and Exegetical Commentary on the Gospel according to Saint Matthew* (ICC; 3rd ed.; Edinburgh: T & T Clark, 1912).

Argyle, A. W. *The Gospel according to Saint Matthew* (CBC; Cambridge: Cambridge University Press, 1963).

Beare, F. W. *The Gospel according to Saint Matthew* (Oxford, 1912).

Blomberg, C. L. *Matthew* (NAC 22; Nashville, TN: Broadman, 1992).

Bonnard, P. *L'Evangile selon sain Matthieu* (Neuchâtel: Delachaux & Niestlé, 1963).

Davies, W. D. and D. C. Allison Jr. *The Gospel according to Saint Matthew* (ICC; 3 vols; Edinburgh: T & T Clark, 1988-1997).

Fiedler, P. *Das Matthäusevngelium* (ThKNT 1; Stuttgart; Kohlhammer, 2006).

Filson, F. *A Commentary on the Gospel according to Saint Matthew* (BNTN, London: Black, 1960).

Frankemölle, H. *Mattäus. Kommentar* (2 Bde; Düsseldorf, 1994-1997).

Garland, D. E. *Reading Matthew. A Literary and Theological Commentary on the First Gospel* (New York: Crossroad, 1993).

Gundry, R. H. *Matthew : A Commentary on his Handbook for a Mixed Church under Persecution* (Grand Rapids: Eerdmans, ²1994).

Gnilka, J. *Das Matthäusevngelium* (2 Bde; HThK 1/1-2; Freiburg: Herder, 1986-88).

Grundmann, W. *Das Evangelium nach Matthäus* (THKNT 1; Berlin: Evangelische Verlagsanstalt, 1968).

Hagner, D. *Matthew* (3vols; WBC 33AB; Dallas: Word, 1993-95).

Harrington, D. J. *The Gospel according to Saint Matthew* (Sacra Pagina; Collegeville, MN: The Liturgical Press, 1991).

Klostermann, E. *Das Matthäusevangelium* (HNT1; Tübingen: Mohr, 1927).

Luck, U. *Das Evangelium nach Matthäus* (TVZ NT 1; Theologischer Verlag, 1993).

Luz, U. *Das Evangelium nach Matthäus* (4 Bde; Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 1985-2002).

Nolland, J. *The Gospel of Matthew : A Commentary on the Greek Text* (Grand Rapids: Eerdmans, 2005).

Plummer, A. *An Exegetical Commentary on the Gospel according to St. Matthew* (London: Stock, 1909).

Sand, A. *Das Evangelium nach Matthäus* (RNT 1; Regensburg: Pustet, 1986).

Schlatter, A. *Der Evangelist Matthäus* (1 Stuttgart: Calwer, ²1933).

Schnackenburg, R. *Das Matthäusevangelium* (2 Bde; Die neue Echter Bibel; Würzburg: Echter, 1985-87).

Schniewind, J. *Das Evangelium nach Matthäus* (NTD 2; Göttingen:

Vandenhoeck & Ruprecht, [8]1956).
Schweizer, E. *Das Evangelium nach Matthäus* (NTD 2; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1973).
Witherington III, B. *Matthew* (Macon, GA: Smyth & Helwys, 2006).

個別研究

Allison, D. C. Jr. *The Jesus Traditions in Q* (Harrisburg, PA: Trinity Press International, 1997).
———. *Studies in Matthew: Interpretation Past and Present* (Grand Rapids: Baker, 2005).
荒井献「理念としての『貧者』——福音書・死と行伝記者ルカの『罪人』理解をめぐって」『荒井献著作集 3』岩波書店，2001 年，259-286 頁
Becker, H. J. and S. Ruzer (eds.). *The Sermon on the Mount and its Jewish Setting* (CRRB 60; Paris: Gabalda, 2005).
Benoit, P. *The Passion and Resurrection of Jesus* (New York: Herder and Herder, 1969) 153-168.
Berger, K. *Formgeschichte des Neuen Testaments* (Heidelberg: Quelle & Meyer, 1984).
Betz, H. D. *Essays on the Sermon on the Mount* (Philadelphia: Fortress, 1985).
———. *The Sermon on the Mount* (Minneapolis: Fortress, 1995).
Bornkamm, G. "Der Aufbau der Bergpredigt," *NTS* 24 (1977-78) 419-31.
Broer, I. *Die Seligpreisungen der Bergpredigt* (Königstein/Bonn: Hanstein, 1986).
Brooke, G. J. "The Wisdom of Matthew's Beatitudes (4QBeat and Mt. 5: 3-12)," *Scripture Bulletin* 19 (1989) 35-41.
Brown, J. K. "Direct Engagement of the Reader in Matthew's Discourses: Rhetorical Techniques and Scholarly Consensus," *NTS* 51 (2005) 19-35.
Brown, R. E. "The Beatitudes according to St. Luke," idem., *New Testament Essays* (Milwaukee, WI: Bruce, 1965) 265-271.
———. *The Death of the Messiah* (2 vols; New York: Doubleday, 1993-94).
Byrskog, S. "Jesus as Messianic Teacher in the Gospel according to

Matthew: Tradition History and/or Narrative Christology," in *The New Testament as Reception* (ed. M. T. Müller and H. Tronier; JSNTSup 230; Sheffield: Sheffield Academic Press, 2002) 83-100.

Carter, W. and J. P. Heil. *Matthew's Parables: Audience-Oriented Perspectives* (CBQMS 30; Washington, DC: The Catholic Biblical Association of America, 1998).

Catchpole, D. R. *The Quest for Q* (Edinburgh: T & T Clark, 1993).

Cazelles, H. "אשרי," *ThWAT* 1.481-485.

Chae, Y. S. *Jesus as the Eschatological Davidic Shepherd: Studies in the Old Testament, Second Temple Judaism, and in the Gospel of Matthew* (WUNT 2/216; Tübingen: Mohr, 2006).

Charlesworth, J. H. "The Qumran Beatitudes (4Q525) and the New Testament (Mt 5: 3-11, Lk 6: 20-26)," *RHPR* 80 (2000) 13-35.

Chouinard, L. "The Kingdom of God and the Pursuit of Justice in Matthew," *Restoration Quarterly* 45 (2003) 229-242.

Combrink, H. J. B. "Shame on the Hypocritical Leaders in the Church: A Socio-Rhetorical Interpretation on the Reproaches in Matthew 23," in *Fabrics of Discourse. Essays in Honor of Vernon K. Robbins* (ed. D. B. Gowler, L. G. Bloomquist, and D. F. Watson; Harrisburg: Trinity Press International, 2003) 1-35.

Cope, O. L. *Matthew: A Scribe Trained for the Kingdom of Heaven* (CBQMS 5; Washington, DC: The Catholic Biblical Association of America, 1976).

Cronje, S. W. "A Study of the Theological and Ecclesiological Consequences of Jesus' Pronouncements in Matthew 16: 18-19 and 18: 18 concerning Peter as the Rock, the Keys of the Kingdom given to Peter, and the Church as the Holder of the Keys of the Kingdom," *Acta Patristica et Byzantina* 14 (2003) 78-96.

Davies, W. D. *The Setting of the Sermon on the Mount* (Cambridge: Cambridge University Press, 1963).

Degenhardt, H.-J. *Lukas-Evangelist der Armen* (Stuttgart: Katholisches Bibelwerk, 1965) 42-57.

Derickson, G. W. "Matthew's Chiastic Structure and its Dispensational Implications," *BibSac* 163 (2006) 423-437.

Dider, M. (ed.). *L'Evangile selon Matthieu: redaction et théologie*

(BETL 29 ; Gembloux : Ducoulot, 1972).

Dormeyer, D. "Beatitudes and Mysteries," in *Ancient and Modern Perspectives on the Bible and Culture* (ed. A. Yarbo Collins ; Atlanta : Scholars Press, 1998) 345-357.

Dupont, J. *Les Béatitudes* (3 vols ; Paris : Gabalda, 1958-73).

———., "L'ambassade de Jean-Baptiste (Matthieu 11,2-6 ; Luc 7, 18-23)," *NRT* 83 (1961) 943-959.

Eichholz, G. *Auslegung der Bergpredigt* (6. Aufl. ; Neukirchen-Vluyn : Neukirchener Verlag, 1984).

Fabry, H. J. "Die Seligpreisungen in der Bibel und in Qumran," in *The Wisdom Texts from Qumran and the Development of Sapiential Thought* (eds. C. Hempel/A. Large/H. Lichtenberger ; Leuven : University Press, 2002) 189-200.

Finley, T. J. "'Upon this Rock.' Matthew 16, 18 and the Aramaic Evidence," *Aramaic Studies* 4 (2006) 133-151.

Finze-Michaelson, H. *Das andere Glück. Die Seligpreisungen Jesu in der Bergpredigt* (Göttingen : Vandenhoeck & Ruprecht, 2006).

Fitzmyer, J. A. "A Palesitinian Jewish Collection of Beatitudes," idem., *The Dead Sea Scrolls and Christian Origins* (Grand Rapids : Eerdmans, 1992) 111-118.

Fleddermann, H. T. *Q : A Reconstruction and Commentary* (Leuven : Peeters, 2005).

Foster, P. *Community, Law and Mission in Matthew's Gospel* (WUNT 2/177 ; Tübingen : Mohr, 2004).

Foster, R. "Why on Earth Use 'Kingdom of Heaven'? : Matthew's Terminology Revisited," *NTS* 48 (2002) 487-499.

Frankmölle, H. "Die Makarismen," *BZ* 15 (1971) 52-75.

Garland, D. E. *The Intention of Matthew 23* (NovTest 52 ; Leiden : Brill, 1979).

Gathercole, S. J. *The Preexistent Son : Recovering the Christologies of Matthew, Mark and Luke* (Grand Rapids : Eerdmans, 2006).

Gibson, C. H. *The Destruction of Jerusalem* (AnBib 107 ; Rome : Pontifical Biblical Institute, 1985).

Goodwin, M. J. "Hosea and the 'Son of the Living God' in Matthew 16 : 16b," *CBQ* 67 (2005) 265-283.

Green, H. B. *Mathew, Poet of the Beatitudes* (JSNTSup 203 ; Sheffield :

Sheffield Academic Press, 2001).

Grimm, W. "Selige Augenzeugen, Luk.10,23f., " *ThZ* 26 (1970) 172-183.

Guelich, R. "The Matthean Beatitiudes: 'Entrance Requirements' or Eschatological Blessings?," *JBL* 95 (1976) 415-434.

———. *The Sermon on the Mount : A Foundation for Understanding* (Waco, TX : Word, 1982).

Gundry, R. H. *The Old is Better. New Testament Essays in Support of Traditional Interpretation* (WUNT 178 ; Tübingen : Mohr, 2005).

Haenchen, E. "Matthäus 23," *ZThK* 48 (1951) 38-63.

Hagner, D. A. *The Use of the Old and New Testaments in Clement* (NTSup 34 ; Leiden : Brill, 1973).

原口尚彰「4Q185/4Q525 における幸いの宣言」『教会と神学』第 42 号（2006 年）41-68 頁

同「黙示録における幸いの宣言」『新約学研究』第 35 号（2007 年）48-62 頁

同「新約聖書と黙示文学・黙示思想」『東北学院大学キリスト教文化研究所紀要』第 25 号（2007 年）61-76 頁

同「使徒教父文における幸いの宣言」『東北学院大学キリスト教文化研究所紀要』第 25 号（2007 年）33-48 頁

同「アレクサンドリアのフィロンの幸福理解」『教会と神学』第 45 号（2007 年）21-36 頁

同「Q 資料におけるマカリズム（幸いの宣言）」『新約学研究』第 36 号（2008 年）48-62 頁

Hauck, F./G. Bertram "μακάριος κτλ.," *ThWNT* 4.365-373.

Hellholm, D. "Beatitudes and their Illocutionary Functions," *Ancient and Modern Perspectives on the Bible and Culture* (ed. A. Yarbo Collins ; Atlanta : Scholars Press, 1998) 284-334.

Hengel, M. "Zur matthäischen Bergpredigt und ihrem jüdischen Hintegrund," *ThR* 52 (1987) 332-341 (=ders., *Judaica, Hellenica et Christianica : Kleine Schriften*. WUNT 109 ; Tübingen : Mohr, 1999, 224-233).

Hoffmann, P. *Studien zur Theologie der Logienquelle* (Münster : Achendorff, 1975).

Hoffmann, P./C. Heil. eds. *Die Spruchquelle Q* (Darmstadt : Wissenschaftliche Buchgesellschaft ; Leuven : Peeters, 2002).

Howell, D. B. *Matthew's Inclusive Story* (JSNTSup 42 ; Sheffield : JSOT, 1992).

Hüneburg, M. *Jesus als Wundertäter in der Logienquelle* (Leipzig: Evangelische Verlagsanstalt, 2001).

Hoyt, T. "The Poor/Rich Theme in the Beatitudes," *JRT* 37 (1980) 31-41.

Jacob, G. "Die Proklamation der messianischen Gemeinde. Zur Auslegung der Makarismen in der Bergpredigt," *Th V* 12 (1981) 47-75.

Jacquemin, P. E. "Béatitudes selon Sain Luc (Luc 6, 20-26)," *Assemblées du Seigneur* 37 (1971) 80-91.

———. "L'Accueil de la parole de Dieu Luc 11,27-28" *Assemblées du Seigneur* 66 (1973) 10-19.

Janzen, W. "'Asrê in the Old Testament," *HThR* 58 (1965) 215-226.

Kähler, C. "Zur Form- und Traditionsgeschichte von Matt.xvi.17-19," *NTS* 23 (1977) 36-58.

Kahmann, J. "Die Verheissung an Petrus," in Dider, M. (ed.). *L'Evangile selon Matthieu : redaction et théologie* (BETL 29; Gembloux: Ducoulot, 1972), 261-80.

Käser, W. "Beobachtungen zum alttestamentlichen Makarismus," *ZAW* 82 (1970) 225-250.

———. "Exegetische und theologische Erwgäungen zur Seligpreisung der Kinderlosen Lc 23, 29b," *ZNW* 54 (1963) 240-254.

Kingsbury, J. D. "The Figure of Peter as a Theological Problem," *JBL* 98 (1979) 67-83.

Klein, P. "Die lukanischen Weherufe Lk 6, 24-26," *ZNW* 71 (1980) 50-59.

Kloppenborg, J. S. *The Formation of Q* (Philadelphia: Fortress, 1988) 172-173.

———. *Excavating Q* (Minneapolis: Fortress, 2000).

Köhler, K. "Die ursprünglichen Form der Seligpreisungen," *TSK* 91 (1918) 157-192.

Köhler, W.-D. *Die Rezeption des Matthäusevangeliums in der Zeit von Irenäus* (WUNT 2.24; Tübingen: Mohr, 1987).

Kvalbein, H. "The Authorization of Peter in Matthew 16: 17-19: A Reconsideration of the Power and Loose," in *The Formation of the Early Church* (ed. J. Ådna; WUNT 183; Tübingen Mohr, 2005) 145-174.

Lichtenberger, H. "Makarisms in Matthew 5: 3ff. in their Jewish con-

text," in *The Sermon on the Mount and its Jewish Setting* (Becker, H. J. and S. Ruzer (eds.) ; CRRB 60 ; Paris : Gabalda, 2005) 40-56.

Limburg, J. T. "Psalms, Book of," *ABD* 5.532-534.

Loubser, J. A. "Memory and Oral Aesthetics in Matthew," *Neot* 40 (2006) 61-86.

Luz, U. "Das Primatwort Matthäus 16.17-19 aus wirkungsgescichtlicher Sicht," *NTS* 37 (1991) 415-33.

———. "Intertexts in the Gospel of Matthew," *HTR* 97 (2004) 119-137.

Lybaek, Lena. *New and Old in Matthew 11-13. Normality in the Development of Three Theological Themes* (Göttingen : Vandenhoeck & Ruprecht, 2002).

McCown, C. C. "The Beatitudes in the Light of Ancient Ideals," *JBL* 46 (1927) 50-61.

McEleney, N. J. "The Beatitudes of the Sermon on the Mount/Plain," *CBQ* 43 (1981) 1-13.

Menken, M. J. J. *Matthew's Bible. The Old Testament Text of the Evangelist* (BETL 173 ; Leuven : University Press, 2004).

Mowery, R. L. "Son of God in Roman Imperial Titles and Matthew," *Bib* 83 (2002) 100-110.

Neuhäusler, E. "Die Seligpreisungen," in ders., *Anspruch und Antwort Gottes* (Düsseldorf : Patmos, 1962) 141-169.

Neyrey, J. H. "Jesus' Address to the Women of Jerusalem (Lk.23,27-31). A Prophetic Judgment Oracle," *NTS* 29 (1983) 74-86.

———. *The Social World of Luke-Acts* (Peabody, PA : Hendrickson, 1991).

Nickelsburg, G. W. E. "Enoch, Levi and Peter : Recipients of Revelation in Upper Galilee," *JBL* 100 (1981) 575-600.

Mussner, F. "Lk 1,48f. ; 11,27f. und die Anfänge der Marienverehrung in der Urkirche," *Catholica* 21 (1967) 287-294.

Niebuhr, K.-W. "Die Seligpreisungen in der Bergpredigt nach Matthäus und im Brief des Jakobus," in *Neutestamentliche Exegese im Dialog* (FS. Ulrich Luz ; hrsg. v. P. Lampe, M. Mayordomo und M. Sato ; Neukirchen-Vluyn : Neukirchener Verlag, 2008) 275-296.

Olmstead, W. G. *Matthew's Trilogy of Parables. The Nation, the Nations and the Reader in Matthew 21 : 28-22 : 14* (SNTSMS 127 ;

Cambridge: Cambridge University Press, 2003).

Pamment, M. "The Kingdom of God according to the First Gospel," *NTS* 27 (1981) 212-32.

Piper, R. A. *Wisdom in the Q-tradition. The Aphoristic Teaching of Jesus* (MSSNTS 61; Cambridge: Cambridge University Press, 1989).

Powell, M. A. "Matthew's Beatitudes: Reversals and Rewards of the Kingdom," *CBQ* 58 (1996) 460-79.

Puech, E. "4Q525 et les péricopes des Bêatitudes en Ben Sira et Matthieu," *RB* 98 (1991) 80-106.

Riedl, J. "Selig, die das Wort Gottes hören und befolgen (Lc 11,28)," *Bibel und Leben* (1963) 252-260.

Robinson, J. M. "LOGOI SOPHON," J. M. Robinson/H. Koester, *Trajectories through Early Christianity* (Philadelphia: Fortress, 1971) 71-113.

———. "Die Logienquelle: Weisheit oder Prophetie? Anfragen an Migaku Sato," *EvTh* 53 (1993) 367-389.

Robinson, J. M./P. Hoffmann/J. S. Kloppenborg eds. *The Critical Edition of Q* (Minneapolis: Fortress, 2001).

Sato, M. *Q und Prophetie* (WUNT II.29; Tübingen: Mohr, 1988) 247-254.

———. "Q: Weisheit oder Prophetie? Ein Gespräch mit J. M. Robinson," *EvTh* 53 (1993) 389-404.

Schmidt, T. E. *Hostility to Wealth in the Synoptic Gospels* (JSNTSup 15; Sheffield: JSOT, 1987).

Schottroff L. "Maria Magdalena und die Frauen am Grabe Jesu," *EvTh* 42 (1982) 3-25.

Schulz, S. *Q. Die Spruchquelle der Evangelisten* (Zürich: Theologischer Verlag, 1972) 76-84.

Schwarz, G. "Lukas 6,22a. 23c. 26. Emendation, Rückübersetzung, Interpretation," *ZNW* 66 (1975) 269-274.

Scott, M. P. "A Note on the Meaning and Translation of Luke 11, 28," *ITQ* 41 (1974) 235-250.

Shelland, B. *New Light on Luke* (JSNTSup 215; Sheffield: Sheffield Academic Press, 2002).

Soards, M. L. "Tradition, Composition, and Theology in Jesus' A Speech

to the Daughters of Jerusalem (Luke 23, 26-32)," *Bib* 68 (1987) 221-244.

Spencer, P. E. *Rhetorical Texture and Narrative Trajectories of the Lukan Galilean Ministry Speeches* (London and New York : T & T Clark, 2007).

Stanton, G. N. *A Gospel for a New People : Studies in Matthew* (Edinburgh : T & T Clark, 1992).

Stanton, G. N. (ed.). *The Interpretation of Matthew* (London : SPCK, ²1995).

Steinhauser, M.-G. "The Beatitudes and Eschatology : Announcing the Kingdom," *Living Light* 19 (1982) 121-129.

Strecker, G. *Die Bergpredigt. Ein exegetischer Kommentar* (Göttingen : Vandenhoeck & Ruprecht, 1984).

———. "Die Seligpreisungen der Bergpredigt," *NTS* 17 (1971) 255-275.

Talbert, C. *Reading Luke—Acts in its Mediterranean Milieu* (Leiden : Brill, 2003).

Tannehill, R. *The Narrative Unity of Luke—Acts* (2 vols ; Philadelphia : Fortress, 1986).

Tuckett, C. M. *Q and History of Early Christianity* (Edinburgh : T & T Clark, 1996).

———. "The Beatitudes : A Source-Critical Study," *Nov Test* 25 (1983) 193-216.

Ulrich, D. W. "The Missional Audience of the Gospel of Matthew," *CBQ* 69 (2007) 64-83.

Van Aarde, A. G. "IHSOUS, The Davidic Messiah as Political Saviour in Matthew's History," in *Salvation in the New Testament : Perspectives on Soteriology* (ed. J. G. van der Watt ; Leiden : Brill, 2005) 7-31.

Vielhauer, P. *Geschichte der urchristlichen Literatur* (Berlin : de Gruyter, 1985).

Viviano, B. T. *Matthew and his World : The Gospel of the Open Jewish Christian Studies in Biblical Theology* (NTOA 61 ; Fribourg : Academic Press, 2007).

Vögtle, A. "Wunder und Wort in urchristlicher Glaubenswerbung (Mt 11, 2-5 ; Lk 7, 18-23)," ders., *Evangelium und die Evangelisten*

(Düsseldorf: Patmos, 1971) 219-242.

Volker, A./U. Rüsen-Weinhold (Hg.). *Logos-Logik-Lyrik. Engagierte exegetische Studien zum biblischen Rede Gottes* (FS. Klaus Haacker; Leipzig: Evangelische Verlagsanstalt, 2007).

Walter, N. "Die Bearbeitung der Seligpreisungen durch Matthäus," *Studia Evangelica* (TU 102; Berlin: Akademie Verlag, 1968) 246-58.

Weinfeld, M. ed. *Normative and Sectarian Judaism in the Second Temple Period* (Library of Second Temple Studies 54; London: T & T Clark, 2005).

Wilcox, M. "Peter and the Rock: A Fresh Look at Matt 16.17-19," *NTS* 22 (1975-76) 75-88.

Zeller, D. *Kommentar zur Logienquelle* (SKK 21; Stuttgart: Katholisches Biebelwerk, 1984).

Zimmermann, H. "Selig, die das Wort hören und es bewahren: eine exegetische Studie zu Lk 11, 27f.," *Catholica* 29 (1975) 114-119.

Zimmerli, W. "Die Seligpreisungen der Bergpredigt und das Alte Testament," in *Dunum Gentilicium* (FS. D. Daube; ed. E. Bammel et. al.; Oxford: Clarendon, 1978) 8-26.